日赤図書館雑誌　2010；17(1)：9-14

◆研修会特集◆

看護職キャリア開発ラダーに連動した研究支援と図書室機能

小 林　美香子

抄録：当院では、2006年度より日本赤十字社事業局看護部の方針を受け、看護職キャリア開発ラダーを運用している。当図書室では、看護研究小委員会と協力し、看護職キャリア開発ラダーに連動した研究支援を実施している。看護職個人のキャリア開発を支援する際、病院図書室はアクセスが容易な知の拠点であることから、存在意義は大きい。2010年４月から開始となった新人看護職員卒後臨床研修の努力義務化を受け、今後さらなる図書室環境の充実が求められている。

Key word：キャリア開発ラダー、研究支援、病院図書室、看護職継続教育、新人看護職教育

Ⅰ．はじめに

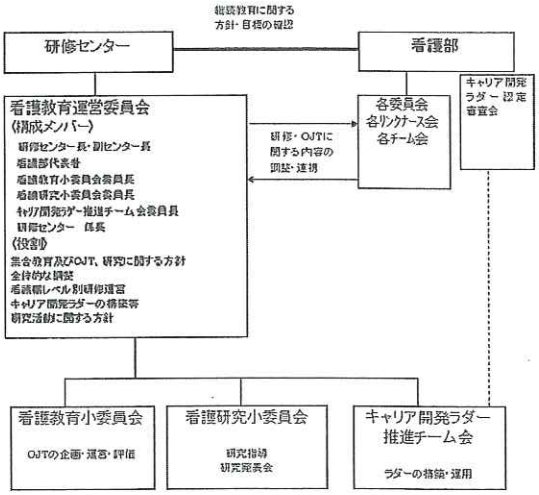

図１　看護職継続教育に関連した機能図

KOBAYASHI Mikako
山田赤十字病院研修センター　図書室
kenshu@yamada.jrc.or.jp

山田赤十字病院研修センターでは、職員の教育・研究の支援を目的に図書室運営を行っている。著者は図書室の業務責任者であるが看護職であり、看護研究小委員会の委員でもある（図１）。本稿では、この立場から看護職キャリア開発ラダーに連動した研究支援と図書室機能の実際を報告する。

Ⅱ．研修センター・図書室の概要

研修センターは、2006年４月、病院の附帯事業であった看護専門学校の閉校に伴い、院長直属の部門として新設された。設立当初の目的は、看護職確保と職員研修を統括することにあった。しかし、設立から５年目を迎える現在では、研修センターの機能は拡大し、地域医療の充実を目指した教育拠点へと役割が期待されてきている（図２）。

図書室は、研修センターに位置づけられている。スタッフは専任の図書主事１名、兼

務の研修係長１名で業務を運営している（表１）。

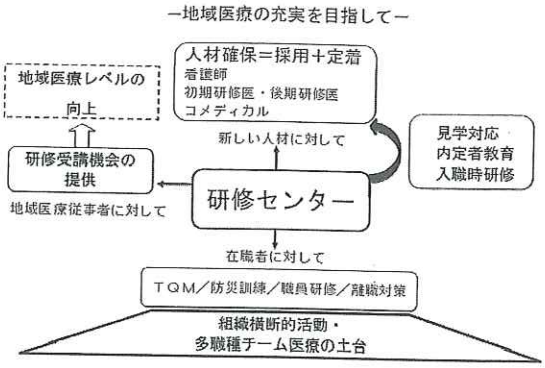

図２　研修センターの役割

表１　図書室業務担当

職　種		担当業務
図書主事（委託・非司書）	専任	・日々の実務（図書室管理・相互貸借・利用指導）
研修係長（看護師）	兼務	・図書委員会事務局 ・起案書作成 ・利用指導

Ⅲ．キャリア開発ラダーと図書室との関係

当院の看護部では、2006年度より日本赤十字社事務局看護部の方針を受け、「キャリア開発ラダー」を導入し、山田赤十字病院キャリア開発ラダーを運用している。

日本赤十字社では、実践能力の習得段階を10年後の人材育成を想定した上でレベルⅠ～Ⅴの５段階に想定し、ラダー別に看護実践能力の到達目標を示している（表２）。赤十字の看護職の看護実践能力は、臨床看護実践、マネジメント、教育・研究、赤十字活動の４領域で構成されている。そして、これらの各領域を段階的に達成していけるよう、レベル別に行動指標が作成されている[1]。なお、当院では、研究の位置づけを明確にするため、研究の領域を独立させ、臨床看護実践、マネジメント、教育、研究、赤十字活動の５領域で構成している。

レベル別の行動指標を図書室担当者の立場から眺めてみると、図書室からの支援なしにキャリア開発ラダーのレベル到達はありえないと考えられる。特に、教育、研究領域の指標については、個人が新たな知識を得、思考を深めることが求められている。これらのことから、アクセスが容易で、院内の知の拠点である病院図書室の存在意義は大きいと考えられる。

表２　赤十字医療施設のキャリア開発ラダーの看護実践能力の到達目標

Ⅴ	施設全体に影響力を及ぼしながら医療の質向上をもたらす看護活動を行う赤十字事業の推進者
Ⅳ	看護部門全体に影響力を及ぼしながら医療の質向上をもたらす看護活動を行う者
Ⅲ	自部署においてリーダーシップを発揮しながら看護活動を行い、スタッフの指導にも関わり、災害時の救護活動に従事できる者
Ⅱ	自部署で自立して看護活動ができる者
Ⅰ	指導や助言を得ながら看護活動ができる者

Ⅳ．領域「研究」のキャリア開発ラダー別支援と図書室機能

病院図書室の役割は、看護職個々が自己学習できるよう支援することであり、当図書室では積極的に利用教育を実施している[2]。

ここでは、領域「研究」に対する支援について、本年度（2010年度）の取り組みを報告する。

１．レベルⅠ支援

看護実践能力の指標「生じた疑問や課題がある時、文献検索などを用いて自身で調べることが出来る」への支援を行う。

採用されたばかりの新人看護職には、病院図書室の存在を周知することから始める。そのため、図書室オリエンテーションを兼ねた入職時研修としている。

本年度のレベルⅠ支援対象者は、41名であり、約4割が大学卒、6割が専門学校卒であった。少人数制の体験型学習とするため、新人看護職を、2日間で8グループに分けて指導した。1グループ2～7名単位とし、各1時間をかけた（表3）。指導は2人体制をとり、図書主事と看護研究小委員会委員（看護師長、がん看護専門看護師）が担当した（表4）。

表3　レベルⅠ支援　研修スケジュール

開催日時		グループ名	人数
4/26	12:50～13:50 (60分)	1-A　1- B	7
	13:50～14:50 (60分)	2-A　2- B	5
	14:50～15:50 (60分)	3-A　3- B	7
	15:50～16:50 (60分)	4-A　4- B	5
4/28	13:00～14:00 (60分)	5-A　5- B	5
	14:00～15:00 (60分)	6-A　6- B	3
	15:00～16:00 (60分)	7-A　7- B	6
	16:00～17:00 (60分)	8-A　8- B	2

表4　レベルⅠ支援　グループ別指導内容

	PC No. 1 担当：看護研究小委員会委員 看護師長(4/26) がん看護専門看護師(4/28)	PC No. 2 担当：図書主事
10分間 （全員）	図書室オリエンテーション ミニレクチャー	
20分間 （半数ずつ）	Aグループ： ①日本看護協会HP ②医薬品医療機器情報提供HP	Bグループ： ①医中誌Web利用体験 ②一次資料の探し方
20分間 （半数ずつ）	Bグループ： ①日本看護協会HP ②医薬品医療機器情報提供HP	Aグループ： ①医中誌Web利用体験 ②一次資料の探し方
10分間 （全員）	まとめ アンケート記入	

教材はオリジナルに作成した。「看護研究Ⅰ　図書室の活用と文献検索」（図3）とタイトルをつけ、最低限これだけは知っておくとよいと思われるものを厳選した。

看護研究Ⅰ

図書室の活用と文献検索

目　次

1. 日本赤十字社 医学図書館
   （山田赤十字病院図書室ポータルサイト）
2. 医中誌Web（医学中央雑誌刊行会）・J Dream Ⅱ
   📖 文献を探そう[1]
   📖 始める前に知っておきたい基礎知識① 文献検索[2]
   📖 AND・OR・NOTの使い分け[3]
3. 検索結果の見方
   📖 医中誌Web
   📖 文献検索を始める前に…
4. メディカルオンライン
5. 図書室での蔵書の調べ方
6. 医薬品医療機器情報提供ホームページ
   📖 医療用医薬品添付文書の検索方法
7. 日本ジェネリック医薬品学会（患者さんのくすり箱）
8. USBメモリで広まるウイルスへの対策
9. 看護研究参考文献

【引用文献】

1) 松本直子：文献を探そう. Nursing Today Vol.24 No.11 p.66-p.67 2009.
2) 伊東泰子：初心者のための看護研究の取り組み. 始める前に知っておきたい基礎知識① 文献検索. EMERGENCY CARE Vol.22 No.2 p.31-p.37 2009.
3) 操華子. 松本直子：臨床看護研究の道しるべ. 臨床で直面する疑問に答える Q&A57:Q15,p.184-p.185
日本看護協会出版会. 2006.

図3　看護研究Ⅰ　図書室の活用と文献検索

研修目的は、自立して文献検索できることであるため、指導者が説明しながら、グループの代表者がパソコンを操作し、医中誌Web、日本看護協会ホームページの各コンテンツの利用体験をした。また、医療に役立つサイト紹介の例として医薬品医療機器情報提供ホームページ[3]を用い、薬剤添付文書の入手を体験した。この時に入力する検索語は、新人看護職がこの時期に最も興味があるキーワードや、薬品名を入力するように促した。なお、薬剤添付文書の入手体験については、医療安全教育の観点から、忙しい仕事の

中でも調べる習慣を身につけて欲しいという願いから研修内容に盛り込んでいる。

2．レベルⅡ支援

看護実践能力の指標「興味関心のある領域の文献を読んでいる」への支援を行う。

看護研究小委員会から対象者に対し、「看護実践の中で生じた疑問や課題に関し、現時点で明らかになっていることを調べ、発表する」との課題が提示される。本年度の対象者は44名であった。図書主事は、看護研究小委員会主催の研修時にオリジナルに作成した「看護研究Ⅱ　文献の探し方・読み方」（図4）を配布できるよう準備し、自己学習を促した。その後は、文献検討発表会で発表できるよう、対象者が図書主事に支援を求めた際に文献検索の支援を行った。

看護研究Ⅱ

文献の探し方・読み方

目　次

1. 研究論文の書き方がスッキリわかる！論文作成のヒント[1)]

2. 病院図書館司書が教える 看護文献検索の技
   第２回　文献検索に役立つツール[2)]

3. 検索結果の見方
   医中誌Web
   文献検索を始める前に…

4. 図書室での蔵書の調べ方

5. 他施設からの文献取り寄せにかかる料金

【引用・参考文献】

1) 吉田澄恵：研究論文の書き方がスッキリわかる！論文作成のヒント.
整形外科看護 Vol.13 No.11 p.66-p.73 2008

2) 山田有希子：病院図書館司書が教える 看護文献検索の技 第２回 文献検索に役立つツール.
整形外科看護 Vol.15 No.5 p.53-p.55 2010

図４　看護研究Ⅱ　文献の探し方・読み方

発表テーマの例として、「笑いに隠れた効果はあるのか？」「尿パッドの重ね使いは本当に皮膚障害を引き起こすのか？」「ギアチェンジ期における家族の意思決定支援にはどのようなものがあるのか？」などがあった。どの疑問も日常の看護実践に密着しているものであるが、文献検索を行う過程においては、キーワード設定に苦慮している様子が見受けられた。その際には、医中誌Webのアドバンスモードを用い、シソーラス用語の使用を説明するなど文献検索を支援した。なかには、レベルⅠ支援研修の受講実績があるにもかかわらず、医中誌WebやJDream Ⅱの使用方法について指導を求めた者もいた。

文献検討発表会終了直後に実施した、対象者へのアンケート結果（回収率100%）では、「図書室は使いやすいと思ったか」について、５段階評価にて3.4±1.6点であった。自由記述には、「書籍や雑誌が豊富だった」「図書主事が一緒に探してくれた」など好意的な感想がある一方、「パソコンの台数が少ない」「狭い」など、ハード面に対する負の意見もあった。

図書主事の感想としては、①利用者が文献のエビデンスレベルを考慮せずに、病院誌や院内看護研究集録の文献複写依頼を行うため、入手困難な文献依頼が連続して舞い込む、②対象者自身で文献検索ができない例が多いため、指導に時間がかかる、などの負担感があった。一方、文献複写依頼の作業を行う際、日赤図書室協議会や東海地区図書室協議会メーリングリストを最大限に活用したことで、利用者のニーズに応えることができたと感じられる機会になった。

3．レベルⅢ以上の支援

看護実践能力の指標・レベルⅢ「看護研究に取り組む」「院内看護研究発表会、三重県看護研究発表会などで発表できる」、レベル

Ⅳ「研究活動の中心的役割を果たすことができる」への支援を行う。

当院看護職の平均在職年数は、10.4年(2009年11月現在）であり、研究に取り組むレベルⅢ以上の対象者は多数存在する。

レベルⅢ支援については、それぞれの研究活動を支援するため、随時対応とし、個別対応の文献検索指導や情報提供を行う。図書主事が特に心がけていることは、代理検索よりも自立して文献検索できるように支援することである。

しかし、この時「調べたいことが何か」を看護職自身が分かっていない場合も多い。その際には、日常臨床の問題意識がどこから発生してきたかを丁寧に聞き取る。そして、キーワードを設定し、文献検索に入る。看護職自身の問題意識が漠然としており、図書室担当者で対応できない場合には、看護研究小委員会が行っている研究指導を受けた後に、再度図書室を訪問するよう促す場合もある。

このように看護研究小委員会と図書室は、表裏一体の関係にあり、看護職のキャリア開発のためには、病院図書室の存在が重要な位置を占める。

Ⅴ．新人看護職員卒後臨床研修に対応した図書室作り

医療安全の確保や新人看護職員の早期離職防止を目的に、保健師助産師看護師法および看護職等の人材確保に関する法律が改正され、2010年４月から新人看護職員卒後臨床研修が努力義務化された[4]。これを受け、新人看護職員が基本的な臨床実践能力を獲得するため、医療機関の機能や規模に関わらず新人看護職員を迎えるすべての医療機関で新人看護職員研修が実施される体制の整備を目指してガイドラインが作成されている[5]。

当院では、新人看護職員卒後臨床研修の努力義務化を見据え、2008年度から新人看護職卒後臨床研修プログラムを実施している。このプログラムは、2004年「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」報告書を考慮し、「山田赤十字病院キャリア開発ラダーレベルⅠ」を基に作成している[6]。

このプログラムには、毎年８月から12月にかけ、新人看護職が所属部署を離れ、２週間の研修を行うローテーション研修が組み込まれている。その期間の前後は、新人看護職が事前学習や振り返り、レポート作成のために必要な資料を求め、図書室を訪れる。

この時に利用される文献の多くは、背景疑問[7]を解決するための標準的な教科書やガイドラインである。教育効果を高めるためには、新人看護職の求めにその時その場で応じられるよう、継続的そして計画的な書籍購入が必要である。また、今後は、新人看護職へのサービス向上を目的に、パスファインダー[8]の作成なども視野に入れる必要があると考える。

Ⅵ．おわりに

看護職キャリア開発ラダーにおける研究活動を推進していくためには、看護研究小委員会と図書室が協力し、個人を支援する必要がある。今後も、組織の発展と個人のキャリア開発を支援するために、病院図書室の機能を発展させていきたい。

参考文献

1）日本赤十字社事業局看護部．看護実践能力向上のためのキャリア開発ラダー導入の実際．東京：日本看護協会出版会；2008．p.11-17.

2）小林美香子、岡田教代：利用指導の実際．日赤図書館雑誌 2008；15(1)：8-11.

3）独立行政法人医薬品医療機器総合機構．医薬品医療機器情報提供ホームページ．

［引用 2010.09.04］. http://www.info.pmda.go.jp/
4）厚生労働省. 政策レポート.［引用 2010.09.04］. http://www.mhlw.go.jp/seisaku/201/01/04.html
5）厚生労働省. 新人看護職員研修ガイドライン.［引用 2010.09.04］. http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/12/s1225-24.html
6）松井和世、谷眞澄、松本ゆかり他：新人看護職研修および教育担当者研修を実施して. 看護 2009；61(5)：58-63.
7）名郷直樹：臨床のための情報検索. 日赤図書館雑誌 2009；16(1)：3-8.
8）市川美智子：図書館パスファインダー作成報告とその可能性. 医学図書館 2006；53(1)：55-59.